



TITLE:

シュピイトホフの景氣循環論(下)

AUTHOR(S):

靜田, 均

CITATION:

靜田, 均. シュピイトホフの景氣循環論(下). 經濟論叢 1929, 29(2): 290-303

ISSUE DATE:

1929-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129775>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷九十二第

行發日一月八年四和昭

論 叢

清涼飲料稅論 法學博士 神戶 正雄

限界經濟學と制度經濟學 文學博士 米田庄太郎

勞銀の理論 文學博士 高田 保馬

說 苑

經濟學史基礎論 法學士 石川 興二

幕末の商社 經濟學士 菅野和太郎

セイの販路說に就て 經濟學士 谷口 吉彦

シュピイトホフの景氣循環論 經濟學士 靜 田 均

雜 錄

伊太利の財政經濟近況 經濟學士 有 井 治

經濟理論と經濟史 經濟學士 堀江 保藏

近着外國經濟雜誌主要論題

シュピイトホフの景氣循環論 (下)

靜 田 均

四 好景氣の存續

國民經濟の運動方向が變り、好景氣が一旦喚び起されると、あとは目を経るに従ひます、その存續ならびに發展に必要な手段がひとりでに作り出される。勞働力および物的生産力の從業の増加は生産擴張に必要な財貨を供給し、増加せる資本投下のための——生産手段および勞働力の購入、從つてまた收益財の生産のための——營利資本の形成を昂める。所得配分の不均等は資本の形成を助長し、間接消費の擴張を容易ならしめる。なかんづく重大なのは物價の騰貴である。何となれば、物價騰貴は生産擴張の最強の動因であり、かつ純利益の收得および營利資本の形成の豊富なる新しき源泉だからである。企業熱が勃興して資本の需要の増大のために利子歩合が騰貴する時分になると、こゝにはゆる大好況が到來する。一つの現象は他の現象を喚び起し、かくて好景氣に特有な諸現象が次ぎから次ぎへと展開される。それは恰かも雪球を轉がすやうに、一回轉毎に大きくなる。資本投下の増大、財の消費の増加、物價の騰貴、利得の増大、生産の擴張、資本形成の増加、それからまた資本投下の増大、等、等、等。産業は從來の失業人口

を悉く吸収したのも、附加的な勞働力を農村および未發展の國土から吸収する。かやうにして斷えずみづから沸騰するところの上向運動が起るのである。

この場合、特に吾々の注意をひくのは、價格の騰貴が全く規則的に間接消費財にのみ起る、といふことである。しかしそれは、間接消費が増加するとすぐ現はれるわけではなく、むしろ徐々にであつて、鐵の消費が以前的大好況の際に達した頂點を超過してから、それゆゑ好景氣が明確となれる好轉の第二期または大好況の段階に入つてから、はじめて現はれることがしばしばある。『間接消費財の規則的な價格騰貴は決して偶然ではなく、好況の必然的現象に屬する。それは増加せる資本投下および増加せる間接消費の何らか必然的な結果であり、好況の本質を形づくる所のものである』。これに反して、『直接消費の増大および享樂財の價格騰貴は、必然的でもない』。

價格騰貴の趨勢が特に間接消費財の領域に擴大するに比例して、當該領域の企業者は特別利得をあげ、特別の資本形成力をもつ。従つて、資本投下の刺激が多いにも拘らず、自己の資力をもつて比較的容易にそれを充たすことが出来る。好景氣の際に大なる利得を收めるものは、企業者と資本家であり、彼等は最も重要な資本形成者である。俸給所得および賃銀所得が價格騰貴以上に増加するといふことは、國民經濟的資本形成を犠牲にし、享樂的消費の代りに間接消費を犠牲にしなければ、不可能であらう。そして間接消費の行はれる産業部門に起る顯著なる價格騰貴は當該部門の被傭者および勞働者の俸給および賃銀の騰貴に對應するといふことは、たゞに理論上

考へうるばかりでなく、多かれ少なかれ事實に合致する、と云つてよい。このことは先づ、當該部門の企業者を犠牲にすることによつて行はれる。すなはち企業者の利得を引下げ、従つて資本形成力および投資の可能性を弱め、つひに間接消費財の價格騰貴を抑制するであらう。他方において、この部門の被傭者および労働者の所得の激増は、まづ享樂財の消費を高め、貯蓄を減退せしめるであらう。一言でいへば、所得變動の現象と享樂財消費の現象とは互ひに對立的關係に立つものである。

五 好景氣の崩壞および生産過剰の發生

好景氣は如何なる場合でも生産過剰をもつて終りを告げる。しかもそれは單なる生産過剰ではなくて特殊の生産過剰である。すなはちシュビイトホフの分析の結果によれば、『その出發點および中心點を形成するものは間接消費財および収益財である』³⁾。

こゝに彼が収益財といふのは、新しき財の生産設備——生産手段の生産設備（例へば鑛山、精煉所、機械工場、煉瓦製造所の如き）ばかりでなく享樂財の生産設備（例へば紡績工場、機械工場、製粉所、パン製造所の如き）をも含む——および耐久的な利用設備（例へば鐵道、住宅、水道、照明裝置の如き）の謂ひであり、それは直接所有者の欲望満足に役立たないで、むしろ収益および所得をあげることによつて間接にその欲望を満足せしめるものである。次ぎに間接消費財といふのは、収益財たる生産設備および利用設備に用ひられる原料のことであつて、直接個人的

消費に供せられずに、物財または利用を生むところの中間財（機械、住宅）の媒介によつてはじめて間接に吾々の欲望を満足せしめるものである。例へば鐵、石炭、煉瓦、セメント、木材等がそれである。さうして今日の資本家的社會においては、収益財の建設および購買は所得をもつて行はれないで、資本化された所得であるところの營利資本をもつて行はれる。それと共に、収益財の生産に必要な間接消費財の販賣もまた、長期の資本投下に依存せざるをえない。これに反して享樂財は、自家消費に供せられるものであり、かつ所得をもつて購買されるのであるから、前者とは著しく趣きを異にするのである。

さてシュビイトホフによると、『間接消費財および収益財は複雑なる資本關係に蔽はれてゐる、そしてこの複雑なる資本關係の闡明は、生産過剰の發生を解く鍵を形成するものである』⁴⁾。かゝる資本關係を構成する基礎的事實として、吾々は次ぎの三つの事象を區別せねばならぬ。(一)間接消費財の生産、(二)營利資本(貯蓄)の形成、(三)營利資本による間接消費財の購買が即ちそれである。さうして國民經濟の健全なる運行が、これら三つの事象の間に一定の均衡を必要とすることは、多言を須ひずして明かであらう。つまり間接消費財の購買が營利資本によつて行はれる以上、一切の間接消費は營利資本の投下に依存するわけであり、従つて間接消費財の生産と營利資本の形成とは相平行しなければならぬ。そしてそのためには、間接消費財の生産者および利貸資本家が互ひに他方の事情を察知して、兩者の適應關係の維持を圖ることを要する。もしもこの間の事情に對する認識が缺け、適應關係が失はれるならば、一方の事象が停頓するに反して他方の

事象が先走るの危険に曝されるであらう。さうしてシュビイトホフによると、好景氣より不景氣への轉回に際して必然的に隨伴する生産過剰なるものは、まさにこの不均衡の具體的表現に外ならぬのである。

『この不均衡の原因は』、と彼はいふ、『主として間接消費財の側に横つてゐるが、營利資本もまたそれに關係がある』。好景氣における熱病的な生産擴張は、生産物の激增を齎らし、ひいて物價低落の趨勢を馴致することにより、純收益を減少せしめる傾向をもつが、他方において勞働力の缺乏に基づく勞賃の異常なる昂騰は、勢ひ企業者の利潤を侵蝕せざるをえない。資本形成力はかくて好景氣の發展と共に二重に阻害されるわけである。それゆゑ、『間接消費財の生産と資本投下の間の不均衡は、資本形成の緩慢化または減退によつても惹起される』。

しかしシュビイトホフによれば、主要の原因は金融の側よりもむしろ財貨の側にあるのである。間接消費財が『新しい間接消費財の生産設備に充用されるや否や、それはそれ自身の生産を大いに高め、かくて營利資本の形態における購買力の需要を増大せしめる』。しかるに企業者が固定的な生産設備を建設するには概して多大の時間を要するものであり、需要が増加したからといつて遽かにそれに應じて供給を増加させることは不可能である。かやうに『需要と生産との間に比較的長い時間的距離があり』、生産設備の建設には着手してもまだ現實的に市場に商品を提供するに至らないとすると、すでに生産設備は十二分に擴張されて近く需要に應ずるだけの潜在的供給能力を備へてゐるにも拘らず、市場の需要に應ずるにはまだく生産設備を擴張する必要がある。

5) 1. c. S. 76

6) 1. c. S. 76, 77

あるやうな錯覺を生ぜしめやすい。そこで需要と生産能力との間の眞の關係は見失はれ、必要以上に資本が投下される結果、いはゆる過剰資本化を惹き起す。殊に好景氣に設立された多くの工場は、不景氣には入つてからはじめて現實的な供給能力を發揮することにより、不均衡を一層激化する傾向がある。

さらに間接消費財の生産過剰を助長する因子としては、間接消費の次ぎの特質が注意さるべきである。すなはち享樂財は、おほむね耐久性に乏しいために短期間に繰り返し新しく代置されるが、耐久性の大きな生産設備および利用設備はその需要もまた長期にわたつて満足せしめられるから、頻繁なる代置の必要は起らない。間接消費財は、數年間の好景氣中に新しい欲望が満足され、あとはその需要が減退する一方である。従つて『収益財の大きな耐久性はその繼續的增加の危險を形成する』⁷⁾。

以上これを要するに、好景氣の終點である間接消費財の生産過剰なるものは、間接消費財とそれの購買力たる自由なる營利資本との間の均衡の破壊であり、その原因は一方においては金融の側に、他方においては財貨の側に横たはる、といふのがシュビイトホフの見解であるが、こゝに注意を要するのは、彼はさらに一步を進めて、かゝる營利資本の缺乏および間接消費財の生産過剰をば、『全體としての財貨の世界の内部における數量的不均衡』⁸⁾に解消せしめてゐる點である。彼によると、一方における間接消費財の生産過剰は、他方におけるその補完財の生産不足を意味する。より具體的にいへば、勞働力およびその生活資料たる諸種の享樂財の缺乏を意味する。さ

7) l. c. S. 77

8) l. c. S. 78, 81. „Leer Kapitalmangel u. s. w.“ l. c. S. 1417

うしてかやうな財貨相互間の關係は、あらゆる經濟組織のもとにおいて成立しうるものであるが、しかしその原因、結果および顯現形態は經濟組織の異なるに應じて種々様々である。間接消費財の生産過剰がその補完財の不足として赤裸々に吾々の眼に映するのは、自給經濟および物々交換經濟の場合に限り、今日の如き貨幣經濟においては事一實相は全く陰蔽される。そこでは實物形態における財貨が、互ひに直接の關係において對立するのでなく、貨幣を媒介とするところの間接の關係において對立するがゆゑに、過剰に生産された間接消費財に對應するその補完財の缺乏は、貨幣的購買力たる營利資本の缺乏となつて現はれるのである。貨幣經濟においては、『過剰に生産された財は、その缺如せる補完財に對する需要として現はれもしなければ、またその價格を騰貴せしめもしない、却つてまづ一方向的に貨幣價值において低落する』。そしてこのことは勢ひ企業に深刻な影響を及ぼし、つひに部分的な價格下落から一般的な價格下落が、部分的な生産過剰から一般的な生産過剰が、展開される。

享樂財の消費は好景氣發生の衝撃たりえないと云ふシュピートホフの見解は、さきに吾々の見たところであるが、なほこの見解と照應して、彼は生産過剰の出發點および焦點に關し、次ぎの如く述べてゐる。⁹⁾『現在のやうな欲望満足の狀態においては、享樂財の一般的生産過剰のために好況の瓦解することは不可能である』。なせなら、享樂財にあつては、『品種を多様にするなり、値下げをするなりして、殆んど無限に新しい欲望を喚起しうる』し、また『享樂財に對する欲望は、間接消費の欲望ほど長時間にわたつて満足せしめられるものではない』から。

六 不景氣および生産過剰の存続

冒頭において述べたやうに、シュビイトホフによれば、生産過剰説は二つの課題をもつ。第一は生産過剰の發生の説明であり、第二はその存続の説明である。第一の課題はすでに前節において取扱はれた。いまや生産過剰の發表を説明することが残された仕事である。

さてシュビイトホフに従へば、『不況はまづ第一に好況、投機過度、および恐慌に對する反動である、——それは精神的にも經濟的にも』¹⁰⁾ 好景氣の際に沸騰した企業熱はその精神的反動として著しく衰退し、資本投下を妨げる一般的不信が發生する。かつて極度の昂奮と緊張を示した營利心は、いまや飽和と無感覺の状態に陥る。不景氣に伴ふ種々の慘害は、營利心および企業熱をいやが上にも壓迫せずにはゐないであらう。一言にして蔽へば、不景氣は經濟心理の萎微沈滞を齎らす。さらにこれを經濟上より見るに、好景氣および投機過度が必要以上の收益財を產出せしめ、しばしば諸種の設備を擴張せしめることは、すでに述べた如くであるが、不景氣における間接消費の減退は大部分、過多の收益財を作出したこの好景氣の反作用に外ならぬのである。

さうして生産過剰の勃發は、國民經濟の發展方向を一變せしめる。資本投下および間接消費は減退し、物價は崩落し、ために多數の生産設備は競争不能に陥り、或ひは利得なしで或ひは損失を忍びながら操業をつゞけ、場合によつては倒産するものすら少しとしない。資本收益の減少、資本の損耗、勞賃の切下げ、および失業は財の消費を壓迫する。恐慌および生産過剰によつて齎

らされた轉向は、異なる經濟諸領域の相互影響のもとに、下降運動をつづける。資本收益、資本形成および資本投下の減少、労働報酬の減少は消費を減退せしめ、消費の減退は物價を下落せしめ、物價の下落は新たにまた資本所得および労働所得を減少せしめ、従つてまた資本形成および資本投下を減少せしめる。かくの如く相互作用によつて一は他を壓迫し、不景氣の諸現象は循環をつづけ、ますます不況の趨勢を強める。

加ふるに最初好景氣の反作用として起つた沈滞の傾向は、さらに次ぎの如き諸事情によつて激化される。第一は所得配分の不釣合である。¹¹⁾ 不景氣の際には資本過剰が支配してゐるから、所得配分の不釣合は資本形成によつて間接消費を助長しえない。それは却つて直接消費の減退を齎らし、不況の重壓を加重するだけである。

第二に生産能率の増進もまた、不景氣の際には好景氣におけると別様に作用する。¹²⁾ 元來、企業者たちは労働作業の改善なり労働を節約する機械の利用なりに注意を怠らぬものであるが、これらの革新は生産過剰を擴大し、多くの設備の價格を減損せしめ、一部の労働者を失業に陥らしめ、熟練労働者を不熟練労働者の群れに突き落し、かくてあらゆる階級の所得を減少せしめることにより、その購買力を弱める傾向をもつ。

第三は企業者の價格政策である。企業者階級は、低い價格をもつて多量の商品を買うよりも、むしろ高い價格をもつて少量の商品を賣ることを有利とする。¹³⁾ 従つて不景氣の際には、彼等はカルテルを利用して生産制限を行ひ、價格の人爲的な吊上げをはかるを常とするが、しかし生産制

11) 1. c. S. 80

12) 1. c. S. 80

13) 1. c. S. 81

限はその反面において勞働機會の減少であり、勞働報酬の低減等であるがゆゑに、究極において購買力の不足に導き、一般的生産過剰の被害を擴大するのである。

七 餘 言

以上數節にわたつて述べたところは、すなはちシュビイトホフの景氣循環論の主要である。

シュビイトホフの個々の見解については、もとより多くの異論を免れぬであらう。いま私はその徹底的な批判の任に耐えるものではないが、たゞこの稿を終るにのぞみ、彼れの所説に側面からの照明を與へるほどの意味で、比較的問題となるべき二三の論點を摘出すると共に、一般に提起されてゐる若干の疑問を附記しておかうと思ふ。

第一、景氣理論は景氣循環を與へられたるものとして、即ち不斷に自己反復を繰り返す波狀運動として説明するか、或ひは沈滞のうちに一種の靜的均衡狀態を認め、好景氣の發生をば新しき事情に基づく動的過程として説明するかによつて、動的理論と靜的理論とに分つことが出来るが、この分け方に従ふと、シュビイトホフのそれは動的理論に編入さるべきものである。¹⁴⁾ すでに見たやうに、彼は好況と不況との統一であるところの景氣循環の全體を正常的狀態と解し、如何にして一の段階が他の段階に必然的に推移するかを説明してゐる。けれどもかういふ説明の仕方は、出發點において論證の主題たるべき景氣循環そのものを——或は少くともその一段階を——推論の前提として定立するのだから、一種の循環論法に外ならない。極言すれば、好景氣は不景

氣の結果であり、逆に不景氣は好景氣の結果である、といふ説明とも見られよう。これはすべての動的理論に共通な根本的缺陷であるが、シュビイトホフもまた當然にそれを免れることが出来ない。

第二、好景氣の發生を説くにあたつて、彼が不景氣の自己恢復力を認めてゐることは、すでに述べたところの如くであるが、これに反して彼は此の箇所で次ぎのやうにも云つてゐる。¹⁵⁾『好況に終結を告げしめる生産過剰は、無條件的必然性をもつて不況を齎らす。しかし好況の後に不況の續くことは、必ずしも無條件的必然的ではない。吾々は從來はさうであつたことを見たが、好況の容易に來ない場合を考へることも出来るのである』。これによつて判斷すれば、一方では好況と不況との必然的循環を認識しながら、他方では不況の永續的進行の可能をも想定するかに見え、従つてその間に多少の齟齬と曖昧とを残すやうに思はれる。吾々はこの點に關し、もつと立ち入つた説明を要求したい。

第三、景氣理論にとつて恐慌の説明が核心的問題であることは云ふまでもないが、景氣の全體性および循環性が論證を要する限り、好況の説明もまた避くべからざる他の重要な部分的問題を形成することは明かである。しかるに恐慌學説は發展史の示すところによれば、從來とかく下降の説明にのみ主もな關心が注がれて、いはゆる上昇の説明はともすれば閑却され、多かれ少かれ粗笨の嫌ひを免れなかつた。この間にあつていち早く上昇問題の意義を自覺してその解決にあつたシュビイトホフの見識と努力とは、たしかに敬服に値ひするであらう。だが、一々の見解

については満足しがたい點も少くはない。例へば、好況は必ず生産財の生産部門より出發し、享樂財の生産部門より出發しえない、といふ見解の如き、その一つである。しかし、享樂財の生産部門に端を發した好況が生産財の生産部門に反射して、そこから顯著なる形態をとつて表面に露出するために、あたかも生産財の生産部門それ自體から出發するやうな外觀を呈する場合も、ありはしないだらうか。享樂財の生産より出發する好況の可能性は、たゞに論理上充分に考へうるのみならず、これを否定する論據もむしろ薄弱なやうである。彼れの唯一の論據らしく見えるものは、『享樂財に端を發し且つそこで頂點に達する』好況は、結局、資本の消耗に歸着し、從つて不況を招來するにすぎない、といふ考へであるが、しかし好況の出發點とその頂點とは分離して考へうるし、また考へなければならぬ。前者は好況の發生に關する問題であり、後者はその進行の度合に關する問題だからである。享樂財の生産部門に端を發した好況が資本の消耗に導いてそのまゝ蒸發してしまふといふことは、この好況が毫も生産財の生産部門に波及せずに、當該部門内だけで頂點に達する場合にのみ妥當する事柄であらう。この場合の好況が畢竟根なし草として枯死する運命にあることは云ふまでもない。けれども享樂財の側から好況が出發するとすれば、その需要増加は勢ひそれに數倍する生産財の需要増加を喚び起さないであらうか。好況は原則として生産財の側から出發するといふ彼れの事實的認識は正しいとしても、何故に然るかの理由づけは少くとも不充分のやうに思はれる。¹⁶⁾

第四、景氣變動の過程において一般的價格騰貴または一般的價格下落の發生することは、何人

も認めるところである。同じ方向を目指すかやうな一般的價格變動が相當長い期間にわたつて繼續するのは何故か。しかも好況には生産が増加するにも拘らず一般的に價格が騰貴し、また不況には生産が減少するにも拘らず一般的に價格が下落することのゆゑに、この事象はより多くの問題性をもつ。ところで好況に關するシュビイトホフの説明について見るに、好況における價格騰貴および生産擴張を可能ならしめる潜在的購買力の貯水池として、彼はもつぱら休閒營利資本の意義を強調してゐる。休閒營利資本が好景氣にとつて重要な役割をつとめることは、もとより論をまねないが、しかし超比例にまで導く生産の全面的擴張は果してこれのみによつて可能であらうか、¹⁷⁾ いづれにせよ、好景氣および生産過剰の槓杆としての創造的信用の機能を輕視してゐることは、やゝ一面的の譏りを免れぬと思ふ。

第五、生産財の生産部門が近代恐慌の擔へ手であるといふ彼れの外面的觀察は、それ自體として素より正しいであらう。そしてこの點に關する精細な分析は、たしかに彼れの直接の先驅たりしツガンの見解を一步進めたものであるといへる。¹⁸⁾ しかし吾々にとつて問題なのはその意味づけである。本來、生産過剰といふ言葉は多義を有する若しくは有しうる言葉の一つであるが、シュビイトホフにとつてのそれは、私自身の見るところによれば、好況の末期における生産手段の生産過剰をば潜在的なる消費財の過剰と見ることをむしろ否認する點において、特異の内容をもつものなのである。

およそ生産過剰に導く不均衡は、これを大別すれば、二つに分つことが出来る。一つは各生産部門相互の生産物數量間における均衡の破壊であり、他は社會の消費購買力と享樂財の生産額と

17) Vgl. E. Lederer: Konjunktur und Krisen. G. D. S. IV Abt. I Tl. S. 387 Fussnote.

18) Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 113. S. 222, 223

の間における均衡の破壊である。この二つはつとにマルクスによつて確説された所であるが、その後の恐慌論の多くは第一の點に關していよく精緻さを加へたにも拘らず、第二の點は殆んどこれを閑却せんとする傾向をとつた。軌近における消費過少説の凋落に對應する生産過剩説の擡頭の歴史は、半面において、この事實を裏書するものに外ならぬ。そしてこの歴史の最初の頁を飾つたものは、かつてゾムバルトによつて『近代恐慌論の父』と稱へられた、かのツガン・バラノヴスキーその人であつた。ツガンとシュピイトホフとの類縁は多くの學者によつてしばしば指摘される所であるが、消費過少説の勇敢なる排撃者である彼が、當面の點に關しても、ツガンと最も近親な血族關係にあることは想像にがたくない。生産過剩の出發點と焦點とを不可分離的に考へてゐることは姑く別としても、彼にあつては、享樂財の一般的生産過剩のために好況の瓦解することは、『不可能』とされてゐるのである。

もちろん、消費的需要が比較的多くの弾力性をもつてゐることは事實である。だが、それには自ら一定の限界がある。所得によつて制約される需要がどうして無限でありえよう。享樂財は品種を變へるなり値下げをするなりしさへすれば、『殆んど無限に新しい欲望を喚起しうる』といふが如きは、あまりに大膽な放言ではなからうか。この點において彼は、『資本家の經濟における商品の需要額は、消費額によつて全然決定されぬ』²¹⁾といふツガンと、まさに好一對である。なほ、間接消費財の生産過剩は必然にその補完財の生産過少を伴ふといふ彼れの見解については、いま立ち入つた論議を試みる餘裕をもたないが、それには少なからぬ疑問の餘地あることを附け加へておく。(完)

19) I. c. S. 130. K. Zimmermann: Das Krisenproblem in der neueren nationalökonomischen Theorie. S. 91 ff.

20) Spiethoff, Art. „Krisen“ S. 67

21) Tugan-Baranowsky, Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England. 1901. S. 26